

「薄暮」

映像学科
高山隆一

「Twilight (Hakubo)」

Department of Imaging Art
TAKAYAMA Ryuichi

本作品は中編映像作品を前提としたオリジナルシナリオである。本作の創作的意図として最初の段階での発想は会話劇の成立である。

一見、映像作品は視覚的要素の重視がまず効果として要求される。事実、教育の現場においても「映像で語る」ことをまず教えることになる。また映画監督もシナリオという文字情報をいかに視覚的情報として提示できるかを最大の課題として演出の計画を立てる。

二人の会話の場合、情報としての提示は演劇的に一箇所の固定カメラで二人を撮影することで事が足りてしまう。また映画技法の一つとして二人をそれぞれ撮影し編集にて交互に提示するという「カットバック」の技法がある。しかしこれはあくまでの情報の提示としての最低限の表現方法であり映画監督を中心とした視覚的表現を担当する部署（主に撮影部）はそこに情報の提示以上の表現に富んだ方法論を模索することになる。

会話劇中心の本作はこのシンプルな舞台設定をいかに提示できるかを考慮に入れて創作をおこなった。

また室内劇としての効果を最大限に活用する方法論の考慮も試みた。

室内劇の妙とされる「ゲアトルド (Gertrud) (1964 監督: カール・T・ドライヤー) や「ドックヴィル (Dogville)」(2003 監督: ラース・フォン・トリアー) 等に本作は触発されている。映像的条件としてはあまり魅力的とは言えない室内での会話劇をいかに有効な方法論の提示ができるかの課題とした。

更には後半の隆の長台詞という聴覚的情報と咲の映像の視覚情報の提示の方法は異なった感覚情報の自由な組み合わせとして映画的表現の方法論を残存させたつもりである。(ヴァイス・オーヴァー等)

「見ること」と「聞くこと」は現代の映画表現に欠くことのできない要素である。また聴覚からの情報は映画の中においては物語を説明する論理的な要素に対して重要不可欠な部分でもある。これら双方の表現方法の工夫された駆使が映画作品自身を豊かな表現方法として活用することになるであろう。(但し必要以上の使用はその効果を陳腐にし半減させることになる。)

以上の点を本作品では意図的に用いて考案したものである。

「遺囑」

脚本・・・高山隆一

登場人物

吉川 隆（よしかわ たかし）（45）
大学のニテノ語教師。単身赴任で東京で一人アパート暮らし。

吉川 結花子（よしかわ ゆかこ）（40）
隆の妻。恩田家の長女。専業主婦。
東京近郊の地方都市に娘咲と妹可奈と3人暮らし。
乳癌を患い再発。

恩田 可奈（おんだ かな）（30）
結花子の妹。恩田家の三女。OL。長女結花子とその娘咲と同居。

吉川 咲（よしかわ さき）（17〜18）
隆、結花子の娘。高校2〜3年生。

恩田 貴子（おんだ たかこ）（33）
結花子の妹。恩田家の次女。
モデル。東京在住。

宮川 嶺（みやがわ れい）（30）
女性。バーテンダー。

○町の風景

遠くに山並みが見える地方の町。

○恩田家外観（朝）

○恩田家・結花子の部屋

外出着の結花子（40）。
鏡台の前で慣れない手つきで化粧をしている。

○恩田家・ダイニングキッチン

食卓には三人分の朝食の準備。
キッチンで調理をしている可奈（30）。
入ってくる結花子。
可奈、キッチンから後ろ向きのまま話しかける。

可 奈「ごめんね、そんなんで。私お姉ちゃんみだうにつまぐできなうから。（笑しながら）私、食ぐせせてめうつ
ほつ。」

結花子「（笑しながら）大丈夫、つまぐできてる。お化粧道具ありがうつ。何もなくて。しばらくしてなかつたから。
うっ、おかしい。」

可 奈「大丈夫、女としてまだまだうける。女子高生の手持ちには見えなう。さすが恩田家最終秘密兵器。」

結花子「(かなしそうに笑いながら) 最終秘密兵器未使用のまま廃棄か・・・」

可 奈「(しまったと思いきや笑いながら) 今晚、ウツツと行ってみる。貴ちゃんに聞いてみていいか?」

結花子、微笑む。

食卓の丰付かずの料理を見て

結花子「呟、行っちゃった?」

可 奈「まだ。なんかぐすくすしてて。(吐く) 呟ーお母さん来たよー」

○恩田家・呟の部屋

ベッドで下着姿でぐすくまっている呟 (17)。

○道

旅行鞆を持つ結花子と可奈。

制服姿の呟。

結花子、呟に向かつて

結花子「ごめんね、置いてくもつて。」

可奈、呟に向かつて言い聞かせるもつに

可 奈「たまにはお父さんとお母さん二人きりにさせてあげようよ。しばらく会ってないんだし。お母さんも東京行つてたまには息抜きしてもらわない?」

結花子「お屋から豊子おばさん来てくれるって言ってるから。」

可 奈「『おばさん』って言うのちやダメだよ。ホテルは返金遅くて困る。でも今日のこの話したら東京から来るって。何考えてるんだか。あのね、絶対お酒買ってくるけど飲んじやダメだからね。」

結花子「おじいちゃんだよ。」

可 奈「いやいや、あとな、男の人と来たら絶対入れちやダメ。そしたら電話して。私が帝国ホテル予約してあげるから新幹線でも深夜バスでも来るんだよ。」

うつむいている可奈を見て

結花子「やっぱり、学校休んで一緒に来る?」

可 奈「(あわてて) だ、だいじょうぶだよ。ね、呟、貴ちゃんにはちゃんと聞いてあるから。そのものは已読だから。自分の姓なんだもの。逆になんかおもしろいもの買ってきてくれるよ。お父さんとお母さんのことわかってあげて。」

呟 「だいじょうぶ。私豊子さんのこと好きだから。落ち着く。」

可 奈「だよな、ああ見えても雑誌でクールエッセイで通ってるから。」

心配そうな結花子。

○田園風景の中の高速道路

高速バスが走っている。

○高速バス車中

隣同士で座っている結花子と可奈。

可奈、鉛を差し出す。

可 奈「舐める? 中、意外と乾燥するから。疲れない?」

結花子「ありがと。だいじょうぶ。ごめん、窓側座っちゃって。」

可 奈「いいよ。広いからこっちの方が好き。でもなんで、新幹線の方がはやるの?」

結花子「景色が好きなの。それに時間をすぐ使うこと諦めたの。無駄をするのが今の自分にとって一種の贅沢。」

可奈、じつと結花子の横顔を見つめる。

結花子「時間をかけて段々ゆっくり変わっていくと見ていたいの。もつね、見る感じが私には許されてないから。そうそう何かが変わっていくのが見えるなんて私には感じ取れないから。」

可奈、話を逸らすもつにもつに

可 奈「そもそも話があるならお義兄さんに来てもらえばいいのに。こっちの事情わかってるんだから。言えは絶対に来るのに。」

結花子「運つ。私が行きたくないの。」

可 奈、ふざけながら

可 奈「不倫とか？やだよ、修羅場なんか。」

結花子、外をほんやり眺めながら

結花子「あの人は浮気なんかできない。するのは本気だけ。」

可 奈「（已惑しながら） そうなんだ。」

結花子、外を眺め続ける。

○高速道路

夕暮れ時。

街のネオへが軒々としてゐる。

○タートル「薄暮」

○高速バスターミナル（夜）

多くの高速バスが往来している。

じいの巨大な広告板に雪子（33）のポスターが貼り出されている。

バスが停留所に停まる。

○ターミナル停留所

停留所で待つ隆（45）。

○高速バス車内

乗客が降りるのを通路で並んで待つ結花子と可奈。

○ターミナル停留所

隆、車外からバスの中を覗こうとするが降りる人に見えない。

○高速バス車内

通路を歩く結花子と可奈。

○ターミナル停留所

乗客が降りてくるのを待つ隆。

全員が降りてきても結花子と可奈の姿が見えない。

不思議がりスマートフォンを取り出し目を細め（老眼）画面を見る隆。

周りを見ると後ろに立っている結花子と可奈。

笑顔の可奈と不安そうな顔の結花子。

○自家用車車内

運転している30歳代の男性。

その助手席には妹。

○デパートの食品売り場

惣菜売り場を並んで歩く隆と結花子。

隆 「可奈ちゃん、家で休んでいけばよかったのに。すぐそこだよ。」

結花子 「修羅場は嫌だつて。」

隆 「で。」

結花子 「(急に笑顔で) 夫婦水入らずだつてよ。もうホトリとつてあるから。そこのななは姉妹一。(笑顔になり) でも損するの姉妹一。」

○東京の繁華街

行き交う人々。

○夜の公園

ベンチに座っている可奈。

コップ二の袋から新品のタバコを取り出し封を切る。

同じく巨田ライターを取り出し火を付ける。

タバコのつぐれをまじまじと見る。

○隆のアパート

ワンルームのアパート。

シンプルなインテリア。

テーブル、椅子、ソファ、本棚、ベッド。

キッチンにはほとんど調理した形跡がない。

テーブルにはデパートの惣菜とお弁当。

結花子、床に平積みになれている本を見ている。

古本の子供向けの世界文学全集。

結花子 「どうしたの、これ？ 書家にもあった。」

隆 「この間、ゴミ捨て場に置いてあったよ。なんか拾ってきたやつ。」

結花子 「学者の使命感？」

隆 「別に。今『三銃士』読んでる。この間までは『五臓』」

結花子、振り向く。

お互い向かい合い見つめ合う。

隆、結花子を抱きしめる。

結花子も身を預ける。

隆、口づけをしようとする。

結花子、顔をそむけ拒む。

隆、結花子を見つめる。

結花子 「ごめん、薬のせいかな。」

○夜の街

繁華街を歌を口ずちみながら歩く可奈。

『椰子の実』

可 奈 「名も知らぬ遠き島より流れ着く椰子の実ひとつ・・・」

○隆のアパート

テーブルに向かい合って食事をしている隆と結花子。

隆 「外でもよかったのに。」

結花子 「かえって普段こつこつの食べられないからいいの。いろんなものが少しづつ入ってて嬉しいの。」

隆 「そんならいいけど。明日〇〇の日だから残してもかまわないから。」

結花子 「〇〇の日合わせの食生活ですか？」

隆 「生〇〇とか洗〇物とか面倒くさだし。東京はあつちに出くてなんでも出せる。」

結花子 「東京ね。」

隆 「それにこの辺じゃ、口に入れるものなんてそこいらじゅうにある。いつでもぞ。選ばなきゃ生きていけない。」

結花子 「力〇女は？」

隆、面倒臭そうに

隆 「いいよ、そんなこと。まあ、これじゃどちが先に逝くかわかんないけどな。」

結花子 「でも数字が出たのは私の方。」

隆 「そう言つなよ。」

結花子 「気を悪くしたのならごめん。でも普通に会話できてるだけでもマシだから。なんならリストカットくらい朝飯前ですから。」

隆、結花子を悲しそうに見つめる。

○繁華街

小さなバーの前に立っている可奈。

入り口には小さな看板。

『女性バーテンダーの店です。』

女性おひとりでも安心してお入りください。』

可奈、取っ手を握るが開かない。

後ろから声がする。

嶺の声 「すみません。」

きちんとバーテンダーの服装をした嶺（30）が麻製のバッグを持って立っている。

嶺 「申し訳ございません、ちもこと買った物に行つたものですから。大丈夫です、おぐお作りでも出来ますから。」

可奈、戸惑つように笑顔を作る。

○隆のアパート

ソファに身体を預け携帯電話で話している結花子。

隆、手持ち無沙汰にベットボトルの二倍の説明書を読んでいる。

結花子 「（携帯電話に向かつて） みんなで来ちゃったの？ 大丈夫・・・そこ・・・力〇オケとやっぱ貴子お婆ちゃんね。歌えた？ こっちは大丈夫。明日は夕飯、こっちで買って帰るから。夕方には帰るから。おぐお父さんはいいの？ うん、うん、じゃまたね、おやすみなさい。」

電話を切る結花子。

結花子 「（隆に向かつて） あんなによかったの？」

隆 「いいよ。顔見えないから何言つていいの？」

結花子 「そっか、いいの？」

沈黙。

隆 「コーラーもないんだよ。せつかくだから外行かう？ 近くにあたらしく温泉できた・・・」

結花子 「（笑いながら） 行けるわけないじゃん。せつへい面倒切除だよ。」

隆、しまつたという顔をしている。

結花子 「別にいいの。何か話したくてきたわけじゃないの。（ふいに） ねえ、早期発見できなかったのはタヌ子女つてこつて私はちゃんとしてなかったのかなあ？」

隆 「そつこつ風に言つなよ。」

結花子 「申し訳ないけど、あなたや周りになくせぬのつかりかもしれなけいもつみんなそつこつ側の人間のつわじい。」

隆 「そつこつ側？」

結花子 「そつ、もつみんなわたしにとつてはそつこつ側の人。」

○バー店内

小ざしりが本格的なカウケンターバー。

お客は加奈だけ。

嶺は丁寧に氷を丸く砕いている。

加奈はタバコを吸っている。

嶺、自分の手元を見ながら

嶺 「無理されない方がいいんじゃないんですか？」

加 奈 「・・・」

嶺 「吸い方サマになってませんか。」

加 奈 「ですよ。」

嶺 「タバコに負けないものお出ししますから。ご旅行ですか、お疲れのようですね。お任せしていただけるのなら疲れにいいものお出ししますけど。」

加 奈 「ありがとございます。いいお店ですね。それに外の看板・・・」

嶺、カクテルの準備しながら笑顔で

嶺 「おかしいですよね。強盗に入ってきたさしこで言ってるものなものです。父の店なんです。お酒も父に教えてもらって。女の人にも入ってもらいたくて。近所の人お父を知ってるんで親切にしております。恵まれてるんです、私。女の人目当てで入ってくる人もいますけど私じゃ魅力ないらしくて。」

加 奈 「大丈夫なんですか？」

嶺 「実は父の友人がこの辺を仕切ってる人で。娘みたいにしてもらっていて助けてくれるんです。でもおかげで誰も近づいてこれないらしくて。しまだに独り者です（笑）」

加 奈 「美人バーテンター、売りになりませんか？」

嶺 「そろそろ人生何でも手に入るなんて虫のいい話ありませんから。何かを手に入れたいなら何かを諦める。ってね（笑）」

加奈、嶺の手をばきに見惚れる。

可 奈 「お上手ですね。」

嶺 「ダメですよ。私はそろそろ初対面の方に無料（タタ）で飲ませるほどお人好しじゃありませんから（笑）」

可 奈 「安心してください。私も心にもないことを言っておの施しを受ける主義ではありませんから。」

お互い笑い合つ。

○隆のアパート

結花子、ベッドに横になっている。

隆、ソファで『三銃士』の続きを読んでいる。

結花子 「私も可奈とホテル行けばよかったかなあ。」

隆 「別にいいよ。ソファで寝るから。もう慣れここだから。」

結花子 「ベッドあるのは。」

隆 「お前と暮らしてた時、『シャワー浴びないと布団に入れない』ってつるさかっただろ。なんかそれが抜けなくて。疲れてなんにもしたくない時なんかソファで服着たまんま寝てた。」

結花子 「殊勝なことですね。教育の成果あったか。」

お互い何かを言ひあぐねている様子。

沈黙に耐えきれないように隆が突然、

隆 「言いたいことがあれば言えよ。急に来るって言ってるし。」

結花子、ふざけながら

結花子 「浮気の素行調査。仕方の上アス探しに来た。お揃いの揃ってんのか。」

隆 「馬鹿言ってるなよ。」

結花子 「馬鹿言ってるよ・・・言えるつちはね。」

隆 「またそんな言い方・・・」

結花子 「わかってるよ。私がみんなを不幸にしていること。味も怖いらしいの。あの子もみんなわかってるみたい。」

隆 「再発のこと。」

結花子「そう。それがどんなことかも。」

隆「まだ決まったわけじゃ・・・」

結花子「21世紀の医学はそろそろ奇跡を起こしてくれるわけないじゃないの。」

隆「・・・」

結花子「ねえ、あの子、初めて男の人に抱かれる時、きちんと私のこと忘れてくれるかな。」

隆「・・・」

結花子「今日来たのはね。あなたにちゃんと見てもらいたかったの。恥かしけど私あなたしか男の人知らないの。身体を見せたのもあなただけ。実はね、最初の手術の後、この身体、誰にも見せないって決めてたの。あなたにも咲にも。この身体は私だけの秘め事として死ぬつもりだった。この身体は誰の記憶にも残さないって。」

隆、何かを察したように

隆「俺でいいのか？」

結花子「他に誰がいるの？でもきついわ。」

隆「いや、大丈夫だよ。」

結花子、笑いながら

結花子「2、3日は流動食しか喉通らないよ。本当にいい？美談の代償は大きいよ。」

隆「脅かすなよ。」

結花子「それくらいは脅かすよ。ここちばあなたに処女捧げた女の切り刻まれた身体見せるんですから。」

お互い無言で向かい合う。

結花子「ホタテを外すのは紳士としての礼儀でしょ？」

隆「ああ。」

隆、ゆっくりと結花子のフックウスのボタンを外す。

隆、啞然とする。

結花子「わかったでしょ？もう私がこっち側の人間じゃなくなってることを。」

隆、泣き崩れる。

結花子「安心して、あなたが弱い人間だなんて思わないから。」

隆「俺がもっと早く気づいてやれば・・・」

結花子「そんなのわからない・・・でもいまはそつうつことにさせて・・・みんなあなたのせいにさせて・・・私はもう自分のことしか考えられなく・・・今のことしか。これからどうなるのかも・・・もう先の予定を考える意味がわからないの・・・。」

○バー店内

お客は依然可奈のみ。

嶺「お綺麗ですね。」

可奈「そう見えますか？」

嶺「言われなはずありません。」

可奈「制服を着てた歳くらいはしかったんです。みんなにちやほやされて。私は違ってたって。」

嶺「今は違ってますか？」

可奈「人は段々自分にとって大切な人がわかってくるみたいなんです。それは綺麗だとか美人とかとは違うみたい・・・私扱いにくい女みたいです。フックウスの品みたいに側にあれば他人から優越感に浸れるみたいで。でもそこ止まり。毎日持つには神経使いすぎるみたい。」

嶺、真顔から笑顔に変わり

嶺「ところで。もう一杯、今日私は主義を変えたくまりました。おごります。私はあなたがどんな人でも構いません。この後私を刺してこのボトルを全部割って血とフックウスキーの海にして立ち去ってしまってください。」

可奈笑いながら

可奈「そこまで人生を傷んでいません。いや、払います。そつしなと私があなたの信条を曲げさせることになっちゃいますから。」

嶺「ではその礼節を快くお受けいたしましょう。その代わり父から本当に心を許せる友にしか出してはいけなと言われたカクテルをお出します。」

可奈「いつもの手じゃないでしょっね（笑）」

嶺 「何、友人とは時間の問題ではありませんし過去に対しての結末論でもありません。未来の友に対してを出します。」

可奈、安心してちよつと意识地そこに

可奈「でもキム・リットには出す予定です。」

お互い笑ひ合う。

○恩田家・リビング

リビングで寝ている貴子。

貴子の女友達が2名と男友達2名。

皆、寝ている。

咲が通りかかる。

貴子、不意に

貴子「咲さあ、こんな奴らでもよければいつでも呼んでもやるわい。大丈夫、男どもには咲には絶対手出すなとて言っているから。まあ、咲の方が言っただけなら別だけど。でもその時は私に必ず言っただよ。人を選んで会わせてるつもりだけだね。私は、お姉ちゃんや可奈めだじにはできないから・・・」

咲「貴子ちゃん、私・・・」

貴子「咲、夏になったら海行こうね。早く寝なさい。まだあのふだりにしやられる。」

咲、貴子のそばに座る。

咲、ワインボトルを見て恐る恐る

咲「これ、おいしいの？」

貴子「禁断の果実に手を出すか。でも嘘は言えない。つまみ。」

咲、決心して空いた貴子の前のワイングラスを手に取り貴子に差し出す。

貴子「いい、味を聞いたから言っただよ。そこはほつちりやめちつ。」

咲「うん。」

貴子、諦めて決心したちつに

貴子「うっや姉妹の中しやはくれもんだから。ししよ、やるつ。」

咲、小声で

咲「貴子ちゃん、ありがうつ。」

貴子「いいよ、でも最初がこんな安物だなんて。わかつてりやもつししもの持ってきた。覚悟決めたさ。」

咲、頷く。

貴子、ワインを注ぐ。

咲、ゆつくり口にする。

○隆のアパート

ペットボトルを口にする結花子。

○バー店内

カクテルを口にする可奈。

○恩田家・リビング

少し顔を赤らめ貴子に寄りかかる咲。

貴子「切れないんだ。」

咲「なにが？」

貴子「なににもかも。」

咲「わかんない、わかんない・・・(少しずつ声が大きくなりやがてまたづらやぐちつに) わかんない、わかんない・・・」

貴子「いいよ、わかつてるから。今日だけだよ、泣けるのは。早く行きな。」

咲、去るつとむちお坊に貴子を抱きこく。
貴子、ゆくり受けとめてあげる。

○冬の東京

行き交う人々。

○町の風景

○通学路

コート姿の学生たち

○恩田家・庭先縁側

隆と可奈が並んで座りコーラーを飲んでいる。

隆 「冬物、いろいろ出してくれてありがとね。俺さ、そこばりわからなくて。」

可 奈 「多分、あれで全部だと思いますよ。」

隆 「いろいろありがとね。あいつや咲のこっ、貴子ちゃんや可奈ちゃんがいらなかったら俺一人じゃいつにもならなかったよ。」

可 奈 「もう両親もいませんし、実の姉ですから。」

隆 「俺は夫なのにね。情けない。(間) もう少し頑張れるかと思っただけとやっぱり難しかったね。そつそつとまけうかないか。」

可 奈 「姉さん、二回目は相当辛そうでした。骨ぐの転移でしたから。抗がん剤も辛いだけで見込みなかつたし。キルトと云ばかりじゃ。もう注射も打つところなくて。おれはもう嫌でした。お義兄さんや咲ちゃんには悪いけど、最後の時辛かつたけど安心したのも本当なんです。ずるいけど私。そついつ人間なんです。」

隆 「そつがなけい、一番損する。」

可 奈 「え？」

隆 「そんなことないよ。可奈ちゃんはよくやってくれたよ。仕事辞めてくれたんだって。あいつのために。」

可 奈 「別に。ちよつと私も色々あって。」

隆 「いいんだ。ありがとね。」

可奈、庭に出る。

可 奈 「お義兄さんのそれいいですよ。『ありがとね』って。その言い方好きです。」

隆 「そつとそんな言われたの初めてだよ。」

可奈、しゃがみこんで

可 奈 「お義兄さん、私姉が亡くなった時、いろいろ語めたんです。正確に言つと去年お姉ちゃんと一緒にお義兄さんの所に行った時に。」

隆、可奈の背中を見つめる。

可 奈 「私だつてわかっているんです。自分がそこそこ男の人の目を引くってことを。学生時代から言ってくる人はいたし、付き合つた人もいたんです。ずるいけどそのことを利用してた時もあったんです。私、お義兄さんを初めて見た時、ああ、この人なら簡単にお姉ちゃんから奪えるなつて。美男子じゃなけい、優しいそつだし大学の先生やつてるから顔は付くかなつて。お姉ちゃんはグズグズしてるし楽勝だと思つたんです。私なら若ししそこそこ自信があつたんです。咲ちゃんはお姉ちゃんに任せちゃえばつて。ひじいじよ。(笑いなから) ファムファタールつていつんでよね、そついつのつて。でもちつタメ。遅いんです。」

可奈立ち上がり、隆の方を回へ。

可 奈 「私、お義兄さんを狙つてたんです、ずつと。義理のお義兄さんてことを口実にして二人で会つたのも全部作戦です。お義兄さんと会つ時は少し化粧を濃くしたり、スカート短くしたり。笑っちゃいますよね。干しめですよ。」

隆 「そつが、そつだつたのか。」

可 奈 「うめんなまじ。何言っているんでしょね。」

隆 「はいや、ちつ終わったことだし。」

可 奈「そう終わったことなんですよ。もうお姉ちゃんにはかなわない。死んだ人はもう何も変わらないうですよ。生き続ける人は醜いところを見せてくるのに死んだ人は永遠にいい人。もう、私がどんなにあがいても入る余地なんてない。あの夜、私わかつたんです。」

○咲の高校（教室）

授業を受けている咲。

○庭先縁側

縁側で再び隆と可奈が並んで座っている。

隆 「俺ね、可奈ちゃんに気がなかつたわけじゃないんだ。最初に紹介された時、美人だと思ったよ。あいつに比べると明るいいし、頭もいいし。そう久しぶりに『聡明』って言葉浮かんだよ。この子の方がって後悔した時もあったし、可奈ちゃんに会いたいって思った時もあったんだ。もしかしたら、あいつも知ってたのかもしれない。勿論、あいつ何も言わないよ。ああいつ奴だから。」

○咲の高校（教室）

咲、友達と笑いながらお弁当を食べている。

○庭先縁側

隆 「俺ね、あいつの最初の退院の時にね、見ちゃったんだよ、風呂場でひたひたで傷のテープを張り替えているの。泣きながらやってたよ。あいつ、誰にも傷見せなかつたんだ。だって自分よりも相手が辛くなると思っただろっね。可奈ちゃん、俺ダメなんだよ。」

○咲の高校（武道場）

己道をする咲。

○庭先縁側

隆 「結花子って、少しのんびりしてて、いつも自分の方が悪くなくても自分から謝っちゃっ方だよ。それに病気も一年くらいしたらもう慣れこまってると思っただ。でもや、一年検診の前日に俺泣かれたんだ『怖い、怖くて』俺、何にもわかってなかったよ。」

○スダシオ

貴子、撮影をされている。
椅子に座って眺めている咲。
咲の前をモデルたちが往来する。

× × ×

出来上がった写真をパソコンのモニターで貴子やスダシオに見る咲。

○スダシオ・メイク室

メイク係にメイクされる咲。

○スダシオ

咲の服を選んでいる貴子。
服を授けられる咲。

○スナジオ

着替えた咲。
大人びた感じ。
ポーシングを教える貴子。
スナジオも笑顔でいろいろなことを咲に教えている。
写真撮ってもらおう咲。

○街

貴子と街を歩く。
貴子、普通の人にサヤ入をしておげている。
ぼんやり眺めている咲。

○カフェ

フレンチを食べている貴子と咲。
代わる代わるホテル風の男女が貴子に話しかけてくる。

○庭先縁側

隆 「可奈ちゃんみたいな子にそついつと言われるの嬉しいも。友達にも可奈ちゃん紹介してあげて言われたし、可奈ちゃんの彼氏ちゃんも羨ましかつたし。もし可奈ちゃんが彼女だったら自慢できるだろうし、みんなも羨ましかるだろうしね。咲も可奈ちゃんだったらいろいろ話してくれるだろうし・・・そつ、咲とはこれから話してやってね。あいつは母親似だからつまく世間とやってくるから心配だし。可奈ちゃん、いろいろ教えてあげてね。俺わかんないところあるから。でもね、可奈ちゃん、可奈ちゃんは俺じゃダメだよ。可奈ちゃんはすつ咲の美人のおばさんでしてよ。」

○浴室

湯船の中で本を読んでいる咲。
ふと、自分の乳房を手で包む。

○庭先縁側

隆 「俺さ、しばらく今のところにいるも。フレンチ語の転職先なんてそつそつなりし。あそつになんとかしなりし。咲も大学決まつたからこつちから離れられなりし。可奈ちゃん、いぬね。咲少し見てくれるかな。大学出るまでいいから。お金は送るから。それに俺さ、可奈ちゃんかそつはいると魔が差しちやつから（笑）後、咲あんまり美人になつてね。恩田美人三姉妹の豊匠さんしてるから元は悪くならはすだつて思つ。男として見る分にはいいんだつてけい、親としては別。そつそつ安眠りはさせなりよ。」

○ホテルの一室

制服姿の咲。
スーツ姿の年上の男性に肩を抱かれる。
男性の左手の薬指には指輪。
男性、口づけをする。

目を開けたままの咲。
男性、優しく咲の胸を包む。
咲の目から涙がこぼれる。

○庭先縁側

隆 「可奈ちゃん、悪いね。婚期遅れたらごめんね。俺さ、落着いたら久しぶりに書こうかと思ってる。少しずつ集めた資料も大分溜まってきたし。まあ、今更、二丁ノ語の論文なんて誰も読めやしなうだろこれ。」

隆、立ち上がり、

隆 「可奈ちゃん、そろそろ行くな。ごめんね、今日は咲と二人だけで。うまくしゃべれるかわからなうけど、なんとかなるかな？行くな。」

可 奈 「お義兄さん」

隆 「うん、いいんだ。咲、なるべく早く帰らせるね。俺はその足で戻るよ。これから入試や学会でしばらく帰れないけど、本当に咲のことをお願いね。あとケリスアス何かいじいのか教えてくれる？。アスとかネックアスなのかな？やつぱりわかんないや。それとなく聞いとってくれると助かるんだけど。一緒に買いにどこか来てくれてもいいよ。お願いね。」

見つめる可奈。

隆 「本当にもついいんだ。」

可 奈 「その論文、できたら読ませてもらえますか？」

隆 「二丁ノ語のこと、知ってるの？」

可 奈 「知りません。（戸惑いながら）オヤトアスとか？」

隆、ちょっと微笑んで

隆 「そうだね。ありがとだね……。明日から冷えるらしいよ。もう冬か……。もう冬なんだよね……。そろそろ冬か……」

○高速バス車内

夕暮れの夜景を眺める隆。

○隆のアパート

部屋に入ってくる隆。

ソファに座り持っていた紙袋からみかんを一つ取り出す。

ゆっくり皮をむき一房口にする。

しばらくホッとした後に『三銃士』をぽいぽいとめくる。

それもやめてベシムに傾向けになる。

天井をじっと見つめる。

涙が頬を伝う。

その涙を拭く女性の手。

(終)

